

\*\*\*\*\*  
 紹介  
 \*\*\*\*\*

高島 文一 著

『続・鍼の道 一内科医の熟年』

本書は、同じ著者の「鍼の道—内科医の青春」の続編である。前著が、亡き父君の意志を継いで鍼の道を極めようと医師の道に進んだが、時代の波に翻弄されて、或いは療養所の医官となり、或いは戦地におもむいたが発病の為内地に送還され、或いは戦後医師にして盲学校の教諭となるなど特異の道を歩んだ四十八歳までの青春時代を活写したものであったのに比べ、本書はその後の四十年間、いわば熟年の時代の歩みを綴ったものである。前著と同じく交流のあった恩師、研究者、同僚、同級生等の名をあげるときは、すべてフルネームをもってして、深い敬愛の念を示しておられる点に、著者の謙虚で愛情豊かな人柄があらわれていてすがすがしい。文中しばしば自己のことを語るより、他の方の業績を讃える姿勢が見られて敬服させられる。

本書は著者の経歴から次の四時代に分けて語られる。

第一章 盲学校時代

第二章 開業医時代

第三章 大学教授時代

第四章 非常勤講師時代

第一章の盲学校というのは京都府立盲学校のことである。著者はここで教諭であり、学校医であり、保健主事であった。盲学校では職業教育として鍼按摩術を教えているが、鍼には経絡の知識が不可欠である。これは古典から学ばなくてはならない。この学び直しを始められたことが語られている。又この間のエピソードとして恩師の日本鍼灸学会会長笹川教授が入院されたため、その代理（非常勤講師）として大阪医大で大学生を相手に生理学の講義を三年勤められたことや、国際盲青年教育者会議がアメリカのボストンで開かれた際、足を伸ばしてロンドンにも寄られたが、ここで王立盲人援護協会長のウイルソン氏から、日本の盲教育は世界最初のものである、平安時代の初期仁明天皇の第四皇子人康親王が盲人を集めて詩歌管弦を教えられたのが最初だと聞かされて驚いたという話など、興味深い話が述べられている。

第二章の開業医時代というのは、著者六十一歳で盲学校を定年で退職したのち、京都市中京区の自宅に高島医院の看板をかかげ、東洋医学を併用する内科治療を志すことにした時代の話である。鍼治療には保険の適用がないのが悩みであったという。当時自分の母校でもある京大病院でペインクリニックが開始されたので、その研修を受けたところそれまでペインクリニックが普及すれば鍼灸は壊滅するのではないかと考えていた事が杞憂であることがわかったという。

又この時代の業績として、京都府医師会の事業として後毎日出版文化賞を受けた「京都の医学史」の編纂が行われたが、これには鍼灸史を担当しておられる。

第三章の大学とは明治鍼灸短期大学、及びのちそれが昇格した明治鍼灸大学のことである。昭和五十三年四月明治鍼灸短期大学が京都の丹波日吉町に開学になった。日本最初の鍼灸専門の大学である。請われてこの大学の鍼灸科の教授に就任した。「東洋医学概論」の講義を担当し、同時に付属診療所長を兼ねることになった。年令はずで六十三歳であったが、立派な鍼灸師を養成すべく充実した日々を送ることとなった。付属診療所も保健診療機関としての認可も受けた。

ここでの研究として本態性高血圧症の鍼治療の成績を発表しておられる。外来患者中一〇%以上の降圧効果が見られたものは、収縮期圧上昇型では六三名中三〇例、拡張期圧上昇型七四名中二六例に見られた。一般に下肢（特に足三里）の治療で降圧を来すことが多いという。

この時期の業績として、昭和五十七年には日本最古の医書「医心方」の第二巻「鍼灸篇」の解説書（至文堂、五八二頁）を出版した。また六十三年には大学での東洋医学概論の講義の草稿をもとに「鍼灸医学序説」（思文閣）を出版した。

この大学が昭和五十八年になって短大から四年制大学に昇格したとき、付属診療所に対し、保険医療機関としての認可が取り消されるという事態が起こった。著者はこれを

「鍼灸を主体とする診療所を排除しようとする謀略」としておられるが、このへんの詳しい事情については触れておられないのは、なにか不満な印象を受ける。

又「鍼灸医学序説」についても出版したと伝えられるだけでこれに盛られた著者の意気込み、本書の特徴など遠慮されたのか、十分に語られていない。積年の抱負など縦横に語っていた良かった。

第四章の非常勤講師というのは関西鍼灸短期大学におけるものである。

昭和六十二年明治鍼灸大学を定年で退官して翌年から大阪府熊取町にあるこの短大で講師を勤めることとなった。ここは前の大学が京都府内とはいえ、丹波の山奥にあったのに比べ大阪平野の海岸近くにあつて、自宅の京都から往復五時間を要する位置にあつたが、ここで五年間楽しい生活を送ることができた。

又この間漢方治療を実施する医師連と毎週一回「素問」の勉強会を八年間続けられたり、その後竜谷大学写字台文庫に蔵される莫大な量の漢籍医学図書の調査研究に一年間従事されたなど息の長い仕事の話が語られる。ここで明代の医書「医宗必读」中の人体内景図に、胃と脾の間に脂膜という臓器が描かれ、また他の書に脂膜と書かれるものがあつたことに気付き、これが脾臓ではないかと判断して、後「脾臓の歴史」と題する研究論文をまとめられるまでの経緯が述べられる。

以上、著者熟年の四十年間の活動を総体的に見るとき、その学術的探求心の老いてますます盛んなことに驚嘆させられる。毎年のように国内外の各種学会に出席されて、ほとんどの学会に時には英語で研究発表をされている。又特別講演等を引き受けられて、その研究心の旺盛なこと、学術的に高いレベルを維持しておられることにただただ敬服する。

全編を読み通して見たとき、前著と同じように、著者が自身の歩みを語るなかで、その当時の社会状況を折り込みながら、臨場感溢れる書き方をしておられるので、同時代に生を受けたものにとつて、実に身近に感じられ、著者の体験が自らの経験のように身につまされ迫るものがある。読後感の誠にすがすがしい、印象深い一書である。鍼灸研究者はもちろん、医学史研究者だけでなく、同時代人にも広く推奨できる好著といえる。

(杉浦 守邦)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、二〇〇五年八月四日、一三三頁、A五版、本体二〇〇〇円〕

栗山茂久・北澤一利 編著

『近代日本の身体感覚』

本書は、編著者を含めて十二名の著者からなる論集とも言うべき著作で、『近代日本の身体感覚』という魅力的なタイ

トルを超える広域なテーマと問題意識が提示されている。全体は「第一部 苦痛の伝統と近代医療」「第二部 身体之美を競う論理」「第三部 視覚が芽生えた近代」「第四部 近代社会の身体化と抵抗」「第五部 こころの重さの伝統」の五部からなっているが、それぞれの部の表題自体が「身体」を標的としながら、そこで語られている身体が多義的であることを示唆している。

第一部は、第一章・鈴木晃仁「戦前期東京における病氣と身体体験——滝野川区健康調査（昭和十三年）を手がかりに」、第二章・白杉悦雄「冷え性の発見」、第三章・酒井シヅ「頭痛の誕生と腹痛の変容」の三章からなり、いずれも近代以降の日本人の病の感じ方（疾病感覚）の変容を、鈴木の場合に主として歴史統計学的手法を用い、白杉と酒井は文献による検討を行っている。

第二部は、第四章・眞島亜有「黄色人種」という運命の超克——近代日本エリート層の「肌色」をめぐる人種のジレンマの系譜——、第五章・鈴木則子「女学雑誌」にみる明治期「理想佳人」像をめぐる「第二章からなっており、近代以降に日本の中・上流階級で意識されるようになった「容姿」を特に肌の色と美容の観点から分析している。

第三部は、第六章・尾鍋智子「眼で食べるお弁当」、第七章・山田憲政「動く襖絵」——日本の伝統的空間意識の二章からなる。前者は弁当の「いろいろ論」の変化から、後者は「動く襖絵」を題材としながら近代日本の遠近法把握と静